

## X線マイクロトモグラフィによる北東北地方

### 縄文時代晩期の籃胎漆器研究の進展

弘前大学人文社会科学部 片岡 太郎  
弘前大学人文社会科学部 上條 信彦

縄文時代の籃胎漆器は、縄文時代晩期の東北地方を中心として特徴的に見られる漆器であり、縄文時代の漆工技術や物資の伝搬からみた集団間の交流、文化圏域に関する考察を進める上で重要な製品の一つである。籃胎漆器は、植物質の素材でカゴを編み、タテ材とヨコ材の間の隙間を漆で目止めしつつ、カゴ全体に漆塗りを施すといったように、編組をベースとする技法的な観点から、編組製品の一種として位置づけられている。

編組製品の詳細な技法研究は、近年の文化財科学分野における有機質遺物の保存技術の発展にもなって、編組技法の観点から地域的な体系化が急速に進みつつある。一方で、漆塗膜で覆われた籃胎漆器では、肉眼では編組の技法を正確に捉えるのは困難で、例えば、破断面など限られた部分の目視による観察やX線撮影を使った透過像の観察などを主な観察手法としてきたものの、詳細且つ製品全体を包括できるほどの技法研究は十分に進められていないのが現状である。

報告者らは、秋田県戸平川遺跡、青森県土井(一)遺跡、青森県平野遺跡などの籃胎漆器の構造について、X線マイクロトモグラフィを使って解析し、漆器の断層像を精密に観察した。結果、編組の素材の大部分が消失していること(または漆塗膜よりも低密度であること)がわかり、

消失した結果残った空洞が編組構造を模していることが明らかとなった。この保存科学的なアプローチから、編組の構造部分をデジタル上で立体視することで、籃胎漆器全体の編組技法の非破壊観察を可能とした。この一連の観察プロトコルを標準化し、北東北地方の籃胎漆器の悉皆的な観察から、籃胎漆器に用いられている編組技法は、縄文時代中期からみられる編組製品の技法と共通しており、技術的観点から、籃胎漆器は編組製品の延長上として捉えられ、漆塗り技術とが融合した製品として捉えられるものである。

本研究はJSPS科研費JP16K16338の助成を受けたものです。